○Casa(カーサ)本拠地『ローランの自室』

デイ、ローランの自室で過ごしている。
ローラン、自室へやってくる。

デイ　「ローラン。もう取引は終わったの？」

ローラン　「あぁ、滞りなくね。中々に手間取ってしまったけれど」

ローラン、セリフを言いながら椅子に座る。

デイ　「そうみたいね」

デイ、席を立ちドリンクを淹れ始める。

ローラン　「初めのうちは普通の取引だったはずなんだけれど……
全く、我々の No.1 は相変わらず短気だ」

デイ　「あら、じゃあ取引に時間がかかったのはそのせいなのね」

ローラン　「あぁ。まさか、取引相手と少し意見が合わなかっただけで銃を取り出すとは思わなかった」

デイ　「あ～……ちょっと前に何度も聞こえてきた銃声のことは聞かないでおこうと思っていたけれど……やっぱり、そういうこと？」

ローラン　「お陰様で、あの場から抜け出すタイミングが中々掴めなくてね。

遅くなってしまった」

デイ、ドリンクを入れる手を止める。

デイ　「……まさか、『Chip(チップ)』も使ったり？」

ローラン　「いや、あの薬を使うまでも無かった。
それに、取引が正式に始まる前に終わってしまったからね。
取引もしてない相手に、品物を見せるようなことはしないさ」

デイ　「そう。じゃあ、あなたも撃ったの？」

デイ、セリフを言いながら席へ戻りローランへドリンクを差し出す。

ローラン　「いや？　私はずっとその光景を眺めているだけさ。
所構わず銃を発砲するのは、紳士として如何なものかと思っているからね」

デイ　「想像ができるわ。微笑を保ったまま椅子に座っているあなたの姿」

ローラン　「ははは、君の想像した通りだったはずだよ、デイ。
……ところで、クロスは何処にいるかご存知かな？」

デイ　「クロス？　いえ？　私はずっとここに居たから会っていないけれど……」

ローラン　「そうか……」

ローラン、立ち上がり背を向ける。

デイ　「ローラン……？」

ローラン、片手を上げデイの声を遮る。
部屋のドアがノックされる。
ローラン、懐に手を入れながら返事をする。

ローラン　「入れ」

クロス、部屋のドアを開き入ってくる。
ローラン、セリフと同時に振り返りクロスへ銃を向ける。

ローラン　「Freeze(フリーズ)」

クロス　「うおっ?!」

クロス、銃を向けられ咄嗟に両手をあげる。

クロス　「俺ですよ、ローラン。クロスです」

ローラン　「……あぁ、わかっていたさ。少し脅かしてみたくなってね」

ローラン、銃を仕舞う。

デイ　「もう、ローランが何も言わずに銃なんか取り出すから何事かと思った……
紳士はこういう時に銃を取り出すのね」

ローラン、セリフを言いながら椅子に座る。

ローラン「おっと、痛いところを突かれてしまったな」

デイ「紳士の行動がどういうものなのか、あなたから色々学ばせて貰っているわ。
クロスも、紳士について学びたいならローランをお手本にしたら？」

クロス「そうですね。
オレもいつか、ローランみたいな紳士になれるようにガンバリマス」

ローラン「おやおや、もしかしてそれは嫌味かい？」

デイ「まさか。褒め言葉よ褒め言葉」

ローラン「ははっ、そういうことにしておこう。
……ところでクロス。なにか報告があってここに来たんじゃないのか？」

クロス「はい、そうです。例の、暗殺者の件で」

ローランとクロス、デイへ視線を向ける。

デイ「(短い溜息)」

デイ、視線に気づき窓辺へ移動する。

ローラン「……それで？」

クロス　「やはり、アナタの椅子を狙った幹部からの命令だったようです。先程、片付けを済ませてきました」

デイ、セリフを言いながらローラン達の元へ戻ってくる。

デイ　「はぁ……なんだか今日は皆物騒じゃない？こんなに物騒じゃ、建物に鉄の匂いが染み付いちゃいそう」

ローラン　「そうなる前に、掃除をしなければならないな」

クロス　「と、言うわけで、オレからの報告は以上です」

ローラン　「ご苦労クロス。この調子で、引き続きよろしく」

クロス　「Yes,sir.（イエッサー）　では、オレはこれで……」

クロス、部屋を去ろうとするクロス。

デイ　「待ってクロス。私も」

ローラン　「おや、クロスの元へ行ってしまうのか――」

デイ、ローランのセリフに被せるように隠し持っていた銃をローランへ向ける。

ローラン　「……冗談だよ」

デイ　「……私だってクロスと話したい事くらいあるわ」

デイ、銃をローランへ渡す。

デイ　「行きましょうクロス」

デイ、クロスを引き連れて部屋を出ようとする。

ローラン　「待った、デイ」

デイとクロス、立ち止まり振り向く。

デイ　「なあに？」

ローラン　「最近ワインセラーから、私が自分用に仕入れたワインが消えていてね。もしかしたら……犬が悪戯をしているかもしれない」

ローラン、クロスへ視線を向ける。

クロス　「っ！　（誤魔化すように咳払い）」

ローラン　「ふっ……チェックを頼めるか？」

デイ、呆れた顔でクロスを見てからローランへ振り返る。

デイ　「……ハッ(笑)、わかった、チェックしておく」

デイ、クロスを引き連れて部屋を出る。

②Casa(カーサ)本拠地『人気のない廊下』

デイとクロス、人気のない廊下で立ち止まる。

デイ　「クロス、あなたまたワイン持ち出したの？」

クロス　「いや、まさか持ち出したやつがローランのだったなんて知らなかったんだよ！
というか、あんなに数あるのに気づくか？　普通」

デイ　「で？　そのワインは？」

クロス　「美味かったよ」

デイ　「そうじゃなくて、って……全く。もう飲んだの？」

クロス　「飲んだ……というか一緒に飲んだだろ」

デイ　「え？　……まさかこの前あなたと飲んだあのワイン？」

クロス　「あぁ、美味かっただろ？」

デイ　「(大きな溜息)……」

クロス　「そんなデカい溜息つくなよ。っと、それは置いといて、本題の方だ」

デイ　「……」

クロス　「上からのお達しだ。近々、また大仕事が来るぞ」

デイ　「……抹殺指令以外の命令がいいわ」

クロス　「いや、そういうのじゃなさそうだぞ。
というか、アンタにそういう類の命令は来ないだろ。
来るとしたら、オレだ」

デイ　「……あなたにも、そんな命令はいってほしくないんだけど……」

クロス　「ははっ、オレが誰かから恨みを買って殺されるかもって心配してんのか？
安心しな、お姫さまを置いて死ぬほど、オレはやわじゃねぇよ」

デイ　「やっぱり今の発現全部取り消すわ。恨まれて死んじゃえ」

クロス　「ひっでぇなぁ……ま、お姫さまを守るのが、騎士(ナイト)の役目ってな」

デイ　「そのお姫さまって言うのやめて」

クロス　「んん？　なにか言ったか？　お姫さま」

デイ　「(蹴り上げる)」

デイ、クロスの足を蹴り上げる。

クロス　「（蹴られる）」

デイ、颯爽と立ち去る。

クロス　「デイッ……！」

クロス、デイの後を追いかける。

③麻薬取締部『本部』・夜

秋愛、椅子に座った恵春に報告をする。
騎冬、秋愛の傍に立っている。

秋愛　「――という事で、私達の報告は以上です」

恵春　「ん、ご苦労だった二人共。今回もよくやったな。
カジノに潜入なんて中々ある事じゃないから、少し心配だったんだが……」

騎冬　「まぁ、確かに胸糞悪いカジノでしたけどねぇ……カジノが嫌いになりそうだった」

恵春　「ははっ。まぁ、『裏カジノ』なんてものがあるトコは、そもそもマトモじゃないさ」

騎冬　「でしょうね。おかげで酷い目にあいました」

恵春　「だが結局、怪我をしたのは秋愛を護ったお前だけだっただろう？
それだけで万々歳だ」

騎冬　「こいつが怪我をするのはダメで、俺が怪我をするのはいいんですか」

恵春　「そりゃ、新人を大事にするのは当然だからな。
それに、こいつが怪我をして一番キレるのはお前だろ」

騎冬　「……まぁ、大事なバディを護るのは当然ですから」

秋愛　「でも、騎冬さんはもっと私の事を頼ってくれてもいいと思うけど」

騎冬　「いやだから……頼りないって言ってるわけじゃないって言っただろ？」

秋愛　「何を言っても、あなたの行動はそう思っているようにしか捉えられないの」

騎冬　「うっ……いや、その……」

恵春　「なんだ。まだ許してもらえてないのか。まぁ、仕方ない感じもするけどな。
怪我をしたお前を抱えながら無傷で帰ってきたこいつが頼りない訳ない。
そろそろ、新人も卒業だな」

秋愛　「ありがとうございます。それで、恵春課長。あのカジノとcasa(カーサ)の
関係性は？」

恵春　「あぁ、隈なく調査してみたが、確信的な繋がりは浮き上がってこなかった」

秋愛　「見つかったのは『Chip(チップ)』だけ……か……」

騎冬　「『Chip(チップ)』が見つかっても、casa(カーサ)についての情報が手に入らないんじゃ、ただ違反カジノを取り締まっただけだな。一晩中走り回ったっていうのに」

秋愛　「それが私達の基本の仕事だから、文句言ってもしょうがないでしょ」

恵春　「まぁ、狙いが外れたって意味では、騎冬の言った通りかもしれないな」

騎冬　「はぁ……まだ道のりは長そうですね」

恵春　「そうだな……まぁとりあえず、今回はお疲れさん。しばらく休暇をとって休んでもいいぞ。家でゆっくり過ごすのも良し、騎冬は秋愛のご機嫌を取るのも良し。好きに過ごせ」

騎冬　「ちょっとボス……」

秋愛　「私、休暇は1人で過ごしますので」

騎冬　「秋愛……」

恵春　「ははは、とにかく。本当にお疲れさん、2人共」

秋愛　「はっ！」

秋愛、恵春に敬礼。